

編 集 後 記

本号を皆様がお読みになる頃は忘年会のシーズンで、2006年が間もなく終わろうとしています。今年の日本消化器外科学会の出来事としては、7月13日から15日にかけて横浜にて、東海大学の幕内博康教授による第61回の定期学術総会が開催されました。テーマは「多岐亡羊から外科本道へ」で、多くの発表や講演が行われたことは、会員の皆様にも記憶の新しいことだと思われます。本学会は1968年7月に第1回が開催されてから、急速に会員数が増加し、実に21,000名あまりの大きな学会となりました。今年は理事長制が採用されて、大分大学の北野正剛教授が初代理事長となり、事務所も茅場町へ移転しましたので、本学会は、まさに新しい時代を迎えようとしています。来年は、本学会の会誌編集委員会の委員長である東京大学の上西紀夫教授による第62回の定期学術総会が開催されますが、そのテーマは「次なる栄光を目指して」となっておりますので、まさに、これからの本学会の発展が期待されます。

Evidence based medicine (EBM) の考え方も定着するようになり、特に原著論文では、このような考え方に沿った論理の展開が要求されるようになってきております。ただし、この evidence は時代とともに変わってきますので、会員の皆様には是非新しい evidence を創っていただきたい。胆嚢摘出術に始まった腹腔鏡手術は、近年では消化器癌に適応を広げ、胃癌、大腸癌に対する手術例が急増しております。そして、GIST などのように疾患概念の変化、内視鏡診断学・治療学の進歩、そして分子標的治療薬の登場など、取り巻く医療の進歩の影響を受けて、消化器外科の新しい evidence が形づくられていきます。毎月、日本消化器外科学会の会誌編集委員会には、多くの投稿が寄せられておりますが、本号では症例報告が12編掲載されています。臨床医学そのものが、症例の積み重ねであり、特に症例報告は若手医師が医学的な内容をまとめて文章化する初めての作業となることも少なくありません。立場上、多くの症例報告の査読を行うことにはなりますが、毎回ながら楽しみでもあります。新しい疾患、新しい治療、そして、比較的多く報告された症例でも、切り口によっては、新しい可能性を見いだせるものです。非常に完成度の高いものでは、各施設の指導医の努力をうかがわせますが、一方、荒削りですが、内容に原石の輝きが隠れているものも少なくありません。そのような論文に、本来の輝きを与えるのが我々編集委員の使命と考えておりますので、来年もどしどし投稿してください。

(柏木秀幸)